

女性同性愛者のアイデンティティ形成について

—異性愛主義の視点に注目して—

Identity formation of lesbian people

—Focused on heterosexism—

田中 有沙

Arisa Tanaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：女性同性愛者，異性愛主義，複線経路・等至性モデル(TEM)

Key words : Lesbian, Heterosexism, Trajectory Equifinality Model (TEM)

1. 研究目的

近年の日本では性的マイノリティに対する認識や受容が広がりつつあるものの未だに異性愛主義が根強く残り，多くの性的マイノリティは生きづらさを感じている．中でも女性同性愛者は社会から不可視化され，ロールモデルが不在であることから，一般の人々が女性同性愛者へどのようなイメージや考えを抱いているのか，女性同性愛者はどのようなプロセスでアイデンティティを形成しているのかは明らかとなっていない．そこで研究1では，一般の若者の異性愛主義傾向，性的マイノリティおよび女性同性愛者への認識やイメージ・考えについて，研究2では，女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセスを明らかにすることを目的とする．

2. 研究実施内容

2-1. 研究1：方法

- ・調査協力者:男性 96 名(平均 22.1 歳)，女性 101 名(平均 18.9 歳)，その他の性別 1 名(24.0 歳)
- ・時期:2018 年 6 月～11 月
- ・手続き:①Ambivalent Sexism Inventory 尺度日本語版 21 項目(宇井・山本，2001)(以下 ASI 尺度)，②性的マイノリティならびに女性同性愛者に対する認識調査 5 項目(河口ら(2016)の調査を参考に作成)，③女性同性愛者に対するイメージや考えの自由記述，以上を質問紙にて実施した．

2-2. 研究1：結果と考察

ASI 尺度の結果は，標準値よりも低いことが明らかとなった．近年では人々の性的マイノリティ

に対する認識や受容が促進されていることが考えられた．性的マイノリティならびに女性同性愛者に対する認識調査では，女性同性愛者という言葉の説明はできると回答する者が多かったが，存在を認識している者は少なかった．女性同性愛者が社会から不可視化されているために，女性同性愛者の実態を把握する者が少なかったのだろう．また，異性愛主義傾向高群にて性的マイノリティならびに女性同性愛者への認識が低く，低群にて認識が高いことが明らかとなった(表 1)．

表 1. 異性愛主義傾向と性的マイノリティ・女性同性愛者に対する認識の関連

性的マイノリティ	高群 (N=99)	低群 (N=99)	t 値
	2.35 (0.61)	2.68 (0.45)	3.15**
女性同性愛者	高群 (N=97)	低群 (N=99)	4.09***
	2.39 (0.22)	2.66 (0.22)	

p<.01*p<.001

次に自由記述についての KJ 法の結果を図 1 に示す．女性同性愛者に対するイメージでは「女性のことが好きな女性」などの説明的な回答や，「カッコいい」などの外見からのイメージを回答とする者が多かった．女性同性愛者に対する考えについては「恋愛は自由」「社会制度が変わるべき」など，女性同性愛者に理解を示す回答や，「生きづらそう」など，女性同性愛者の生きづらさを認識している回答が見られた．若者の女性同性愛者への認識や理解の改善が示唆される一方で，イメージ・考えともに「分からない」「特になし」などの回答が多く見られたことから，女性同性愛者に対する人々の傍観者の態度があることが考えられた．

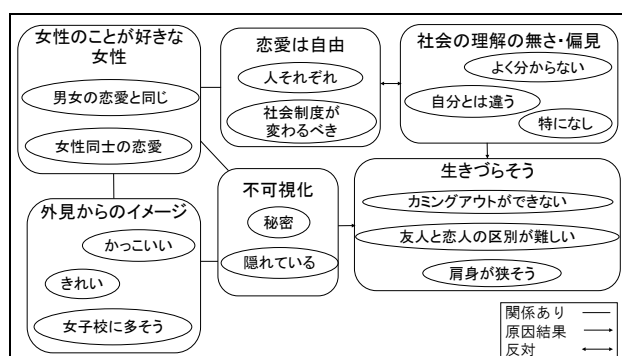


図1. 女性同性愛者に対するイメージと考え(簡略図)

2-3. 研究2: 方法

- ・調査協力者: 女性同性愛者 4 名(平均 22.3 歳)
- ・時期: 2017 年 10 月～2018 年 7 月
- ・手続き: 調査協力者に個別に半構造化面接を各 3 回実施
- ・インタビュー項目: セクシュアリティ、カミングアウト、ロールモデル、将来等について。

2-4. 研究2: 結果と考察

女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセスを複線経路・等至性モデル (安田・サトウ, 2012) によって分析した結果を図 2 に示す。4 名のプロセスは、Cass(1979)や Troiden(1989)の提唱した同性愛者のアイデンティティ形成プロセス理論におおよそ則していた。はじめは自身のセクシュアリティについて明確でなかったが、徐々に女性を性的指向とすることを自覚し、異性愛主義的環境と自身のセクシュアリティの狭間で葛藤したが、家族や友人にカミングアウトをしたなどを通して女性同性愛者としてのアイデンティティを形成していることが明らかとなった。女性同性愛者のアイデンティティ形成の抑制要因としては、異性愛主義的環境や、周囲の同性愛者に対する差別発言などがあり、促進要因としてはロールモデルとなる性的マイノリティとの出会い、周囲によるセクシュアリティの受容などがあつた。さらに、ロールモデルの不在や友人と恋人の区別が難しいなど、女性同性愛者特有のアイデンティティ形成における困難性のあることが考えられた。

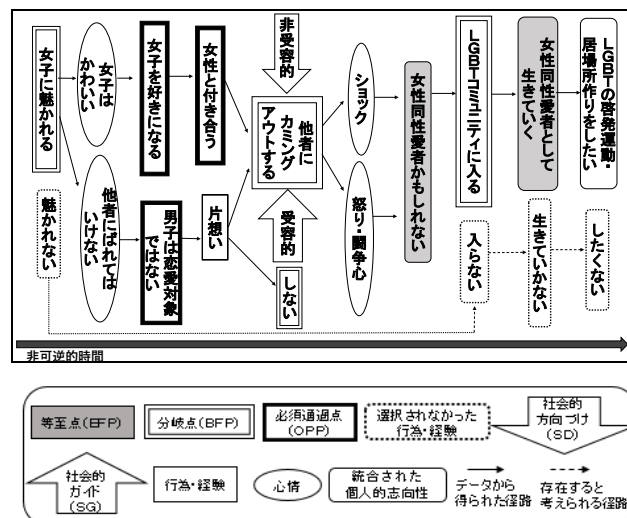


図2. 女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセス(簡略図)

3. まとめと今後の課題

研究1における若者は異性愛主義傾向が低いものの、女性同性愛者に対して「分からなさ」や「見えにくさ」を感じ、距離を取ろうとする傾向にあることが考えられた。研究2では調査協力者が異性愛主義的環境と自身のセクシュアリティとの間で葛藤しながらも、最終的には女性同性愛者としてのアイデンティティを形成していることが明らかとなった。特に、女性同性愛者であるとカミングアウトをし、受け入れてくれる他者や、ロールモデルとなる性的マイノリティに出会うことにより女性同性愛者として生きていく決意につながっていた。周囲の環境が受容的であるほど女性同性愛者が自身のセクシュアリティに悩まず、自分らしく生きていけることが考えられた。

今後の課題としては、インタビュー調査における調査協力者の年齢層を広げ、青年期以降を含めた女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセスを明らかにすることであると考えられる。

4. この助成による発表論文等

①学会発表

田中有沙. 女性同性愛者のアイデンティティ形成について—異性愛主義の視点に注目して—日本心理臨床学会. 2019 年 6 月 6 日～9 日. パシフィコ横浜.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成 DB3018「女性同性愛者のアイデンティティ形成について—異性愛主義の視点に注目して—」を受けて行ったものである。